

津波来る・来ないの判断は

要因様々必ず逃げて



みやがわ のりみつ 議員 宮川 徳光

ただし、非常に長い揺れがあり、海溝型地震の特性を表した地震で、恐らく今回の伊予灘程度の揺れだったと思う。なので、震度や揺れの長さで津波が来ないという判断をするのは非常に危険である。

あの震度4の揺れがあったて、科学的知見で津波の恐れはない、例えば気象庁よりの「津波の心配はありません」などの情報入手がない状態では、必ず逃げて頂かなくてはならない。これは黒潮町が進めてきている防災の根幹だ。

問 昨年3月の伊予灘沖地震は、マグニチュード6.2で、当町では震度4ほどの揺れが10秒ほどだった。その時、津波浸水予想地域の多くの方々が、津波は来ないと判断して避難しなかったように見受けられた。その状況について、また、津波が来る・来ないの判断について、町はどのように考えているか。

答 大西町長

例えば、1605年の慶長の地震の揺れは小さかった。

問 地震発生時の中山間地域の孤立化防止に向けての道路整備は。

答 松本 情報防災課長

防災を考慮した迂回路は、多い方がいいと思うが、現状、町が2300人の最悪犠牲を

出すときの93%は津波による被害である想定されていることを根拠に、海岸沿いの浸水域を優先して順位づけをしている。

なお、町道、林道、農道については、防災とはまた別角度の整備もあるうかと思う。

告知端末放送

住民の活用状況の把握は

全戸訪問により

操作指導も

問 告知放送は町からの情報伝達手段の一番手だと思いが、住民が十分に活用されていないような声も聞こえてくる。

町は、この利用状況の現状把握をどのようにしているか。

答 松本 情報防災課長

町内の告知放送端末機設置総数は4975件。そのすべてを戸別訪問し、現状把握をした。その結果、大方地域3455件中、4.1%の14



町内初の「地区防災計画シンポジウム」には多くの町民が参加 (H27.10.31)

2件が電源を切っていた。理由は、音がうるさい等が68件、コンセントの差し込み口の不足などが35件、長期不在が8件、その他が31件。

また、佐賀地区1520件中、1%の16件が電源を抜いていた。その理由は、音がうるさい等が6件、長期の不在が7件、コンセントの差し込みの不足などが1件。その他が2件。佐賀地区の率が非常に低いのは、ケーブルテレビ

【その他の質問】

※町有施設の管理について